

NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

74

2013
1014

ひと雨ごとに秋の気配が深まるこのごろ、皆さまにおかれましてはお元気でお過ごしのことと存じます。ニューズレター都市史研究74号をお届けいたします。本号では7月に行われました第77回都市史研究会例会についてのご報告と、6月と7月の計2回にわたり開催されました合同沼地研究会についてお届けいたします。また10月に予定しておりますワークショップのお知らせに加え、本研究会の活動に深く関わる成果が出版されましたのでご紹介させていただきます。

第77回 都市史研究会例会

2013年7月22日、東京大学工学1号館建築会議室にて第77回都市史研究会例会が行われました。吉田伸之氏の著書『伝統都市・江戸』（東京大学出版会、2012年）の書評会として、評者を小松愛子氏（東京大学・埋蔵文化財研究室）と竹ノ内雅人氏（東京大学・日本史学研究室）が担当されました。以下に参加記を掲載いたします。

参加記

当日は吉田伸之氏の著作『伝統都市・江戸』を竹ノ内雅人氏と小松愛子氏によって評され、吉田氏からのリプライが行われた。まず竹ノ内氏と小松氏から本書の構成と内容の整理が分担して行われ（竹ノ内氏—序・第I部：1～3・補論1、第II部：5～8章、小松氏—第I部：4章、第III部：9～11章、補論2）、評者それぞれの研究を素材に疑問点や質問が挙げられた。竹ノ内氏からは第I部にまとめられた城下町論とその方法論を評価するとともに、飯田城下町を事例として地方中小城下町における方法論的有効性と限界—在地社会や近隣在方との関係のなかで捉えていく必要性—が指摘された。一方、小松氏からは吉田氏が民衆世界を含み込むかたちで町人地社会全体を、武家地・寺社地の存立をささえる「都市社会の賄機能」として評価した点の重要性が指摘され、これまで研究蓄積のすすんできた組合・仲間の質の差異による類型化の必要性と、浅草寺を具体的な例にあげながら出入商職人仲間という社会集団への着目が地域特性をさらに明らかにしていく視角となるのではないかと提示がなされた両者の報告後、吉田氏からのリプライを中心に活発な議論が行われた。

高橋元貴（東京大学大学院工学系研究科）

第5,6回 合同沼地研究会

2013年6月20日（第5回：於 東京大学工学部1号館建築会議室）および7月26日（第6回：同セミナー室）、伊藤毅氏が代表をつとめる合同沼地研究会を都市史研究会との共催にて開催いたしました。第5回は田付秋子氏と藤崎衛氏、第6回は坂野正則氏と勝田俊輔氏による報告が行われ、報告後は活発な討議がなされました。以下、各報告者による報告要旨を掲載いたします。

報告要旨 古アイルランド法からみた中世初期アイルランド社会—『クリース・ガヴラハ』を通して

8世紀初頭の『クリース・ガヴラハ』（以下CG）は、身分に関する代表的な古アイルランド法文書である。本報告では、同法の主題である身分と、各身分の者が所有する土地や家屋、動産などに関する詳しい記述のふたつの側面に注目し、同文書の史料としての価値について再検討しながら、8世紀頃のアイルランド社会の一端を明らかにした。

CGは自由人身分を17に分ける。極めて細分化された身分の現実性は疑問視され、D.A.ビンチーは理論的な内容のこの法文書に同時代史料としての価値はないと断じた。本報告ではこの点について再検討するため、身分に関する法『ウラケフト・ベグ』や、法以外の史料における身分呼称との比較を行った。『ウラケフト・ベグ』では聖職7品級を強く意識し、支配者、平民、詩人、職人などをすべて7身分に分類しているが、CGではこのような作為性は認められない。他方、年代記や聖人伝等の場合、法文書のような細かな身分名称が用いられることはあまりない。古アイルランド法制度において重要な役割を果たす名誉額は各人の財産を基準に定められ、名誉額の多寡に基づく社会的階層ができていた。CGの詳細な身分区分は、この既存の名誉額に基づく階層関係を整理分類した結果だと思われる。したがって同法の身分区分や名称の理論的な性格を否定することはできないが、全く根拠を欠くものではない。

CGにおける各種の動産・不動産の描写は具体的かつ詳細であり、しかも現実をかなり正確に反映していることが考古学の発掘調査によって裏付けられる。当時の生活に関するCGの記述から得られる情報の同時代史料としての価値は高い。家畜の種類や数、家屋の大きさや形状、農地の広さ、道具や家具、食生活にいたるまで具体的な生活の諸相を知ることができ、極めて素朴な住居で農耕と牧畜を営む質素な暮らしがわかる。また牛の特別な重要性も読み取れる。農村生活に関するCGの記述は、この法文書が理論に終始した想像の産物ではなく、現実社会の観察に基づくものであることを物語っている。

田付秋子（立教大学他非常勤講師）

報告要旨 中世ローマの都市空間

本報告は二部構成をとった。第一部では中世ローマの歴史を都市空間という観点から通時的にたどり、第二部では教区という観点から明らかとなる中世ローマの特徴を論じた。

1) ローマ帝国下で4世紀にキリスト教が公認・国教化されて以降、ローマはキリスト教的都市として変遷をたどり始めた。市壁の内外にヴァティカンやラテランなどのバシリカ聖堂が建設され、異教の神殿からキリスト教の教会への改築が進んだことなどによりキリスト教的都市としてのイメージが醸成される一方、修道院や教会の数は増え、名義教会（tituli）が小教区の役割をはたすようになった。9世紀半ばにはムスリムの

侵入と略奪によりテヴェレ川対岸のボルゴ地区（ヴァティカンを含む）が城壁で囲われ、また11世紀初頭以降は有力な貴族家系が台頭し、彼らが保有していた塔や邸宅が防備要塞化されるなど、古代ローマ以来の都市構造は変化をこうむった。中世ローマの政治的情景は宗教的・世俗的支配をめざす教皇、名目的統治権を唱える皇帝、都市行政権を追求する元老院という三者の力の相関関係により進展するが、15世紀にシスマ後の教皇がローマに落ち着くことで教皇の世俗的支配が確立した。

2) ところで中世ローマにおける教会の管轄する区域と行政的な区割りは一致するのかという問いが提起されうるが、本報告ではそれらは一致しないという点を確認した。助祭区は3世紀末頃から9世紀末まで7つ存在したが、これは12ないし13あった行政地区（regiones）とは無関係であったと考えられる。他方、司祭が洗礼を施す主要な教会は名義教会（tituli）と呼ばれ11世紀末に28を数えたが、この時期には枢機卿団が形成され、そのヒエラルキーにもとづいて都市教会制度が合理的されるという上からの教区編成の動きだけでなく、名義教会でない教会が小教区教会の地位を主張し獲得するという下からの教区再編成の動きも見られたことは注目に値する。

藤崎衛（東京大学）

報告要旨 ミディ運河建設の人物誌研究—イタリア・コネクションとナント王令体制を中心に

ミディ運河は、ガロンヌ川河岸の都市トゥルーズと地中海港湾都市セトとを結ぶ全長240キロにわたる巨大インフラとして、1660年代から80年代にかけてラングドック地方で整備された。本報告では、運河建設の推進に貢献した技師や財務取扱人financiersと呼ばれる金融業者の家系・婚姻関係、友人関係をはじめとする人的紐帯と人物の教育過程や執筆活動・知的交流を含む文化環境に分析の焦点を当てることから、運河建設を準備した時代的・地域的特性を明らかにすることを目的とする。特に、「イタリア・コネクション」と「ナント王令体制」の側面に着目して分析を進める。なぜなら、運河建設に携わった主要な人物の中にはイタリア系移民が複数含まれる一方、ベジエをはじめとする運河周辺地域の都市の中には、カルヴァン派信徒のプレゼンスが強い地域も含まれるからである。

まず、リケの事業に協力した技師のフランソワ・アンドレオッシを検討した。ルッカの都市貴族家系に属する彼は、ミディ運河建設に関わる以前、パリにおいてイエズス会中等学校で自然科学を含む教育を受ける一方、ルッカの移民家系との関係を築く。その後、1660年に実施したイタリア巡見では、閘門と貯水池を複数観察したことが確認でき、この経験が、モンターニュ・ノワールにおけるミディ運河の水利システムの計画に影響を及ぼしたと考えられる。

次に、アンドレオッシの作成した地図とイタリア水利学著作の翻訳から、運河建設とイタリア文化との関わりを考察した。特に、アンドレオッシの地図から、分水嶺・自然河川の利用計画や閘門周辺環境の整備計画を読み取ることができた。他方、カステリ著の『流水の尺度について』は、ミディ運河建設委員会に献呈された翻訳書であるが、その出版地がモンターニュ・ノワール北部のアグ川沿いの小都市カストルであり、翻訳者がカルヴァン派信徒であることを指摘した。また同じ記者によるトリチェッリの『重い物体の運動について』の「動水論」に関する論考の翻訳が、トゥルーズ高等法院評定官で数学者のフェルマに献呈されていることもこの都市の持つ文化的背景の豊かさを示す。

そこで最後に、カストルの文化環境を分析した。この都市には、ナント王令による規定に基づき「王令法廷」と呼ばれるカトリック・カルヴァン派同数の司法官による法廷が設置された。したがって、この都市で

は、法曹を主体とする宗派間接触が日常的に存在した。他方、1648年にはカルヴァン派のアカデミーも設置され、フェルマに代表される都市を訪問してきたカトリック評定官との学術交流も積極的に進められた。17世紀中葉には、都市周辺部の水利事業が進められる一方、ミディ運河に投資することになる財務取扱人は、婚姻関係や交際を通じて都市内部での社会的影響力を強めつつあった。それゆえ、ミディ運河建設のための宗派越境的人脈や知識の一部は、カストルで準備された。

要するに、カトリックのフランス王権によるミディ運河建設の求心力に対して、イタリア・コネクションとカルヴァン派信徒という2つの「他者」は遠心力を構成したことになる。

坂野正則（武蔵大学）

報告要旨 19世紀初めのダブリンにおけるカトリックの埋葬—信仰と権力の交錯

本報告は、19世紀初めの都市ダブリンにおけるカトリックの埋葬の問題を切り口に、カトリックとプロテスタント（アングリカン）の関係について考察を試みた。

宗教改革によって、アイルランドでもプロテスタントが国教となった。人口の大多数はカトリックのままだったが、全土で修道院が閉鎖され、教区教会は国家によって接収された。18世紀を通じて宗教的寛容が実現し、カトリックも信仰の自由を得たが、新たに教区を確定し、教会（礼拝堂）を建設したため、プロテスタントおよびカトリック両方の信仰システムが併存することになった。ただしこれは生者の信仰についての話であり、死者に関しては別の構図で見ることが可能である。

19世紀初めのダブリンにおいて、カトリックの死者が存在する場所（埋葬される場所）は、旧カトリック（現国教会）の教会墓地であった。法的には国教会墓地での埋

葬儀礼は、国教会聖職者が執り行うことになっていた一方で、国教会の儀礼の後であれば、カトリック儀礼を行うことも禁じられていなかった。だが、こうして二度の儀礼を行うことは、プロテスタント、カトリック双方にとって受け入れ難く、そのため「衝突を防ぐ慣行」が成立していた。すなわち、カトリックは葬儀を自宅などで済ませて、教会ではごく簡単な埋葬儀礼を行うにとどめ、国教会聖職者もそれを黙認して、国教会式の儀礼は行わない、というものである。

この慣行が破られるのが1823年であり、ダブリンでのカトリック名士の埋葬に際して、国教会の墓守が儀礼を制止し、続く別な埋葬の際にはカトリックの群衆が教会脇の道路で正式な埋葬儀礼を行うなど、緊張が高まった。この問題はグレートブリテンの公論でも取り上げられ、政府は新法を定め、カトリックは正式儀礼の許可を国教会聖職者に求めること、そして国教会聖職者はこの許可を出すこととした。しかし、カトリックは許可制を嫌い、同法は死文化した。これとは別に、ダブリンでは1830年前後に任意団体が超宗派の共同墓地を開設し、ここではどの宗派でも埋葬儀礼の執行が可能とされた。さらにこの墓地には、19世紀アイルランドの最大の政治家オコンネル（カトリック）やパーネル（プロテスタント）が埋葬されるなど、宗派を問わず各界の多くの人間が埋葬され、また墓石も宗派と無関係に混在するなど、「信仰の自由」がアイルランドでもっとも理想に近い形で実現した空間と考えられる。

勝田俊輔（東京大学）

ワークショップ「小谷汪之氏の近世インド社会史論に学ぶ」開催のご案内

10月19日（土）小谷汪之先生をお招きしてワークショップを開催いたします。インド史学をはじめ、日本史学、インド哲学、社会人類学をご専門とされる諸先生にご参加いただき、最近のお仕事を中心に、小谷先生のインド社会論、文化史論から多くを学ばせていただくという盛りだくさんな企画となっております。

研究者や院生・学生の皆さまにとって、小谷史学のエッセンスを直接学ぶ貴重な機会となるはずです。お誘いの上、多くのご来場お願いいたします。

日時：2013年10月19日（土）午前10時～午後6時

場所：東京大学法文2号館・第3会議室

（本郷キャンパス。法文2号館アーケードから事務室入口を入り、階段で3階へ。右上方左奥。）

なお、茶菓子・コーヒー代、レジユメ代として500円を頂戴いたします。

スケジュール：

I 部 小谷汪之氏による講義 10時～12時

小谷汪之氏 「インド中世・近世社会の構造と動態—『世襲的家職・家産体制』論」

II部 ワorkshop「インド社会・文化史論」

<セッション1 インド社会論を学ぶ> 13時半～15時半

書評『インド社会・文化史論—「伝統」社会から植民地的近代へ』を読む

報告1：小川道大氏（インド史・人間文化研究機構・東京大学）

「『インド社会・文化史論』からインドの植民地化を考える」

報告2：吉田伸之氏（日本近世史・東京大学名誉教授）

「都市類型論を考える」

リプライと質疑

<セッション1 インド社会論を学ぶ> 16時～18時

書評『罪の文化：インド史の底流』を読む

報告3：永ノ尾信悟氏（インド哲学・東京大学名誉教授）

「小谷先生の『罪の文化』を読む」

報告4：小田亮氏（社会人類学・首都大学東京）

「人類学から穢れ論を考える」

リプライと質疑

※ 終了後に本郷三丁目界隈で懇親会を予定しております。ぜひあわせてご参加ください。

【ワークショップに関連する小谷汪之氏の著書】

- ・『インドの中世都市』岩波書店、1989年。
- ・『罪の文化—インド史の底流』東京大学出版会、2005年。
- ・『インド社会・文化史論—「伝統」社会から植民地近代へ』明石書店、2010年。
- ・小谷汪之、山本真鳥、藤田進共著『土地と人間—現代土地問題への歴史的接近』有志社、2012年。

出版物のご紹介

前々号(72号)にてご紹介いたしました『飯田・上飯田の歴史』の下巻が、2013年6月飯田市教育委員会から刊行されました。飯田市ウェブサイトより解説と本書より目次をご紹介いたします。上巻とあわせて、ぜひ御覧ください。

飯田市歴史研究所編『飯田・上飯田の歴史』(下巻)(飯田市教育委員会、2013年6月)

下巻は序章・終章・本編8章からなる10章立てです。序章では飯田・上飯田地区の近代・現代史に関する概要と課題について述べ、本編8章で明治維新から戦後までの歴史を取り上げ、終章では1980年代から現在までを概観し、本編の内容をまとめています。

(飯田市ウェブサイトより)

目次

序章 近現代の飯田・上飯田

近現代の飯田・上飯田をとりあげる意味／近現代史の史料／明治時代から第一次世界大戦まで／第一次世界大戦から第二次世界大戦まで／飯田大火・戦後復興から現在へ／飯田・上飯田の近現代史へのまなざし

第一章 城下町から近代都市へ

第一節 総説／第二節 明治初年の藩政改革／第三節 明治初年の士族／第四節 明治のまちづくり／第五節 近代の小学校／第六節 自由民権の時代／コラム 上飯田で働く人びと

第二章 飯田町の商業発展

第一節 総説／第二節 近代飯田商人の変遷／コラム 『竹枝町巷談』にみる小京都飯田町／第三節 産業革命と飯田町／コラム 「天下の糸平」といわれた田中平八／第四節 飯田町の生活と移動する人びと／第五節 疾病・医療と飯田病院／第六節 菱田春草の絵と表現／コラム 菱田春草と飯田／コラム 太平を行き交うヒトとモノ

第三章 上飯田村の近代

第一節 総説／第二節 日露戦争と人びと／第三節 水の利用をめぐる対立／第四節 上飯田の農村景観の変化／第五節 中央線開通と太平街道／第六節 上飯田村の小学校／コラム 上飯田村出身の弁護士今村力三郎

第四章 大正デモクラシーと市制施行

第一節 総説／第二節 伊那電の延伸と飯田駅開設／第三節 下伊那生年運動と自由大学／第四節 デモクラシーと飯田の教育／第五節 大正期の「理想選挙」／コラム 飯田町最初のデモ／第六節 飯田市制施行／コラム ラベルからみた飯田の商工業

第五章 変わりゆく大正・昭和初期の生活

第一節 総説／第二節 賑わった飯田の「祇園祭」／コラム 縁日の街 飯田／第三節 軒を連ねる商家の町本町通り／第四節 生活を支える松川入／第五節 女性と子どもの暮らし／コラム 花柳界の女性の暮らし／第六節 建物と町並みの変化／コラム 昭和恐慌と飯田・上飯田

第六章 戦時下を生きた人びと

第一節 総説／第二節 総動員体制と飯田市／コラム 総動員体制下の市民生活／第三節 農業移民として「満州国」へ／コラム 開拓地での生活／第四節 在郷軍人会の活動／第五節 戦時下の子どもたち／第六節 復員・引揚げ・未帰還問題／コラム 敗戦間際の市民生活

第七章 飯田大火と戦後復興

第一節 総説／第二節 大火から立ち上がった飯田市／第三節 占領と民主化／コラム 公職追放と飯田市／第四節 新しい教育の出発／第五節 復興計画の進行とりんご並木／第六節 昭和の大合併／コラム 大火後の住宅事情

第八章 高度成長期の飯田

第一節 総説／第二節 安保闘争と市中デモ／第三節 文化運動と公民館／第四節 高度成長期の飯田／第五節 三六災害と飯田市街地／第六節 中央自動車道開通と市街地の変容／コラム 太平区の解散／コラム 幻の鉄道中津川線の六〇年

終章 飯田・上飯田の現在

丘に立つ町・飯田／「丘の上」中心商店街の危機感／「丘の上」への誇りと再開発の動き／田園と住宅、上飯田の変容／表玄関飯田駅の地位低下／小さな世界都市、飯田／人形劇フェスタと公民館活動／「新しき時代に生きん」岸田國土のメッセージ

巻末資料

2013年7月、吉川弘文館より『遊郭社会 1 三都と地方都市』が刊行されました。以下に本書「刊行の辞」より本シリーズの位置づけと目次をご紹介します。ぜひご一読ください。

佐賀朝・吉田伸之編『遊郭社会 1 三都と地方都市』(吉川弘文館、2013年7月)

この二巻からなるシリーズ『遊郭社会』は、日本の近世から近代を中心に、性売買をめぐる社会=空間構造の特質を、「遊郭社会」という視点と方法から総合的に把握しようとして始められた、数年にわたる共同研究の成果である。こうした取り組みの最初の成果は、『年報都市史研究』17号「遊郭社会」(山川出版社、2010年2月)における8本の論考として結実している。その後も、海外のメンバーを含めた多くの研究者の参加を得て共同研究を推進し、ここに本シリーズのかたちで、その成果をまとめて公表するものである。

(本書「刊行の辞」より)

目次

シリーズ遊郭社会 1 三都と地方都市 序文 | 吉田伸之

第一部 江戸

吉原の女芸者の誕生 | 浅野秀剛

遊女を買う—遊女屋・寺社名目金・豪農— | 横山百合子

江戸の子供屋 | 神田由築

第二部 京・大坂と長崎

島原—近世京都の遊郭社会— | 杉森哲也

「孝子」褒賞にみる遊女と茶立女 | 塚田孝

近世大坂天満宮の茶屋仲間 | 屋久健二

長崎と丸山遊女—直轄貿易都市の遊郭社会— | 松井洋子

第三部 金沢と宿駅・河岸

十九世紀金沢の遊女と出合宿 | 人見佐知子

利根川下流域の河岸遊郭と地域社会 | 米谷博

郡山宿の旅籠屋 | 武林弘恵

品川歩行新宿と食売旅籠屋 | 吉田伸之

News Letter 都市史研究 Vol. 74
2013年9月26日発行初版、10月14日改訂版

事務局：〒113-8656 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院工学系研究科建築史伊藤研究室内
編集担当：高橋元貴（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）

News Letter 都市史研究